シャイラー博士をいたむ

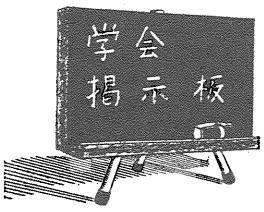
この原稿の書きはじめたころに　シャイラー博士(Dr. J. Frank Schairer) が　1970年9月26日になくなられたことが日本に報じられた．　筆者はちょうどその3週間前 IMA—IAGOD の70年日本会議の Pre-Excursion で　北海道旅行に参加された博士夫妻と　洞爺　支笏湖などの見学に同伴することができ　また京都では　国際会議場での会議終了後　九州の見学旅行に旅立たれる博士夫妻を見送り　博士らも帰国されて日本旅行のつかれをいやしておられることだろうと思っていた時に　凶報にせつし　信じられない気持であった．

第27図は　北海道見学旅行中の夫妻のスナップで　バスのとまるたびにビールを買ってあおるようにのんでおられた姿が今でも目にうかんでくる．　高温　高圧のはなしのなかでもシャイラー博士の名がよくでてくるので深く哀悼の意を表したい．

博士は　1904年ニューヨークのロチェスターに生まれ1925年化学でバチェラーを　1926年には地質でマスターを　また1928年には同じく化学で博士号をイェール大学からえた．　1927年から停年までずっとカーネギー地球物理学実験所 (Geophysical Laboratory　Carnegie Institution of Washington) に席をおき　なくなるまで珪酸塩鉱物の相平衡の研究1つに生きてこられた．　若いときには　有名なボーウェン博士と数多くの論文を発表され　研究室の仕事のすすめ方も非常にエネルギッシュであったと聞いている．

1953年から科学アカーデミーの会員であり　同年アメリカ地質学会からディメダル (Arthur L. Day Medal) をうけている．　アメリカ鉱物学会長　地球化学会の会長や国際火山学会の副会長をつとめるなど　国内的にも国際的にも多くの要職につき　幅の広い活動をおこなった研究者といえよう．　1968年には退官記念の論文集が多くの弟子によって　American Journal of Science の Schairer volume として刊行され　立派な論文が数多く発表された．　1気圧下で珪酸塩鉱物の相平衡の実験者は世界的にも少なくなりつつある．　このような時期に博士をうしなったことは　世界の学会にとって大きな損失であるといわなければならない．　再度深く哀悼の意を多くの地質学者とともに表し　この号をおわりにしたい．

(筆者は北海道大学理学部地質学鉱物学教室)



・物理探鉱技術協会

1. 昭和46年4月26日(月)〜28日(水)
2. 物理探鉱技術協会春季講演会
3. 東京上野公園　国立科学博物館
4. 物理探鉱技術協会
5. 神奈川県川崎市久本135　物理探鉱技術協会　☎ (044) 86—3171

・Asian Regional Conference, International Association of Hydrogeologists

1. 1971年8月18日〜27日
2. 国際水文地質学会アジア地域会議
3. 東京
4. 日本地下水学会
5. 川崎市久本135　地質調査所水資源課内
   日本地下水学会　☎ (044) 86—3171 (代)

・地学団体研究会

1. 昭和46年5月3日(月)　4日(火)　5日(水)
2. 地学団体研究会　第25回総会
3. 交渉中
4. 地学団体研究会
5. 地団研第25回総会準備委員会
   東京都新宿区河田町8　地質調査所鉱床部
   北　卓治　☎ (03) 341—7131　内線328

・日本地学教育学会

1. 昭和46年8月24日(火)〜29日(日)
2. 日本地学教育学第25回全国大会
3. 東京都立教育研究所及び東京学芸大学
4. 日本地学教育学会
5. 東京都小金井市貫井北町　東京学芸大学地学教室内
   日本地学教育学会
   ☎ (0423) 21—1741

・日本分光学会

1. 昭和46年5月24日 (月) 〜25日 (火)
2. 昭和46年度　日本分光学会通常総会・講演会研究発表ならびに装置部会シンポジウム
3. 国立教育会館　東京都千代田区霞が関3—2　☎(03)582-1251
4. 日本分光学会
5. 東京都新宿区百人町4—400　東京教育大学光学研究所内
   日本分光学会　☎ (03) 362—7881

〔注〕1. 開催年月　2. 会合名　3. 会場　4. 主催者
5. 連絡先 (掲載順位は原稿到着順)